日本語母語話者の類義語分析に見られる妥当性の低い意味説明の特徴

坂　口　和　寛

要　　旨

本研究は、日本語母語話者の類義語分析において生じる、妥当性の低い意味説明の特徴と問題点を探った。日本人大学生への調査で得た類義語対「準備／用意」の意味説明記述のなかから妥当性に問題のある説明を取り上げ、“類義語のどのような意味特徴について何を説明しているか”という点から精査した。その結果、妥当性の低い意味説明では、意味特徴に対する焦点の当て方が限定的であるという問題点が把握できた。類義語対の意味内容のうちの一側面にのみ焦点を当てて説明がなされる場合が見られ、結果として重要な意味特徴が見逃されていた。また、妥当性の低い意味説明に関するもう一つの問題点は、説明内容の精度の低さである。類義語の弁別にとって重要な意味特徴に焦点化しながらも、分析対象語の意味内容としては認められない事がらや関連性のない事がらを説明するケースが見られた。こうした意味説明は的の外れた内容となっており、妥当性の低い説明となる。

キーワード：類義語分析，意味特徴，日本語母語話者，妥当性の低い意味説明

1．問題の所在

日本語教師（以下、教師）には、文法や語彙などの指導の基盤となる、高度な日本語力が求められる。そうした日本語力としては高度な日本語知識が重要だが、同様に日本語を分析する力も不可欠となる。授業内外で遭遇する日本語の問題に教師が対処しようとするとき、有している日本語知識だけでは十分に解決できない場合も多く、自身で日本語を分析する必要に迫られるためである。そうした教師自身による分析が強く求められる日本語問題の代表的なものが、類義語や類義表現とその使い分けである。類義関係にある語句や表現形式は日本語指導上の重要性が指摘されており（倉持1986、大森・鴻野2013、市川2018）、指導に際しては学習者に相違点を明示しなければならない。一方で、類義語や類義表現の微妙な相違点を的確に把握し明確に言語化することが求められるため、分析の困難度は高い。

一般的に、類義語分析に際して教師に求められる日本語の知識や分析技術は、日本語指導経験を通じて身につき、向上していくと考えられる。また、専門的な日本語知識の獲得には類義語辞典や教師用指導書などが役立つが、それらは日本語分析技術の向上にも有用だろう。辞典や指導書などの類義語に関する記述は正確さと妥当性が高く、教師が行う類義語分析にとっては規範となる[1)]。そうした規範的な記述に照らすことで、教師は自身の類義語分析の正しさや妥当性が確認できる。そして、規範的記述と自力での分析内容との間に大きな

相違がある場合には、その原因を自身の分析プロセスに求めることが重要である。しかし、分析内容の単なる答え合わせにとどまるなら、規範的記述の活用は分析技術の向上や改善にはつながりにくいだろう。

また、類義語など日本語に関する辞典や教師用指導書の記述は、教師が行う日本語分析にとっての目指すべき目標ともなる。教師は、日本語に関する専門的な知識の蓄積や分析技術向上によって、規範的記述のような妥当性の高い分析ができるようになることが望ましい。特に、語彙や表現形式の意味内容を的確に分析できることは優先度が高い。意味内容は辞典や教師用指導書の記述で第一に扱われる主要な言語特徴であり、日本語指導上も優先的に扱うべき重要項目である。例えば星野（2008）は、語の意味について外国人学習者に「いい説明」をするための留意点の一つに、用法の説明より先にまずは意味をほかの言葉で易しく言い換えてみることを挙げている。また鴻野・高木（2016）は、初級日本語教育における新出語の意味の導入で、状況説明や例文、教具、ジェスチャーなどを用いる必要性を述べている。日本語の制約がある初級学習者に多様な方法で意味を説明する必要性は、語彙指導における意味特徴の重要さを示唆している。しかし、意味特徴に関する規範的な記述は精錬されたものであるため、同様に正確で妥当性の高い分析を行うことは、日本語の専門的知識や分析経験の不十分な初心者教師や一般の日本語母語話者（以下、母語話者）にとって容易ではない。例えば、坂口（2020）では、意味説明の成否によって母語話者の類義語分析に特徴的に見られる「対比」という分析手続きを探ったが、弁別的な意味特徴を十分に説明できていない母語話者は、分析対象語の意味特徴とは考えにくい事がらに言及していた。このように、日本語指導経験がない母語話者の類義語分析では妥当性の低い意味説明がなされ、規範的記述とは大きく乖離しうる。しかし、そうした意味説明については精査できておらず、妥当性の低さに関する特徴が現状では明らかになっていない。

一般的な母語話者に限らず、教師であっても規範的記述から乖離した妥当性の低い日本語分析を行う場合がある。例えば鈴木ほか（2008）は、現役教師などによる「初・中級レベルで説明が容易でない言葉」の説明を評価し、評価の低いものについては問題点を指摘している[2)]。しかし取り上げられている説明は日本語指導を想定したものであるため、説明内容そのものだけでなく文構造や構成、例文なども評価の対象となっている[3)]。さらに、初級レベルの語彙や文型を用いて説明するという条件があり、評価においては学習者の理解などへの配慮も重視されている。以上のことから、鈴木らが取り上げている評価の低い説明は、その特徴や問題点が必ずしも意味説明と関係づけて分析し評価されているわけではない。

また鈴木ほか（2008）は、日本語に関する説明の成功例と失敗例を対比できるため、教師の日本語分析に非常に有益な情報を提供する。しかしながら、取り上げられている失敗例は相対的に少ない。日本語分析の失敗例を初心者教師や母語話者が目にする機会は現状において少なく、日本語分析技術の向上に有益な、“反面教師”となる失敗例が活用できる環境にはない。そうした環境のなか、教師の日本語分析力養成のためには、日本語分析の失敗例とその実態を明らかにすることが不可欠である。なかでも、類義語の意味特徴説明に見られる妥当性の低さという問題からは、教師の日本語分析技術向上にとって重要な手がかりが得られるはずである。類義語に関する妥当性の低い意味説明では、どのような事がらがどのように述べられているのだろうか。また、そうした意味説明のどこにどのような問題があるのだ

ろうか。妥当性の低い意味説明の特質や問題点を具体的に把握することは、日本語分析での失敗から効果的な日本語分析のあり方を考えるための重要課題といえる。

２．研究目的

日本語母語話者の類義語分析に見られる妥当性の低い意味説明について、焦点が当てられている意味特徴とその説明内容の２点から、特質と問題点を明らかにする。そして、その成果を基に、類義語の意味特徴を分析する際に日本語母語話者が陥りやすい問題とその対処方法を探る。

３．研究の方法

日本語教育経験のない日本語母語話者を対象とした調査を実施し、類義語対の意味特徴を説明した記述を収集する。得られた意味説明記述については類義語辞典などの意味記述に照らして精査し、説明内容の妥当性に問題の認められる部分を抽出する。そして、そうした説明において焦点化されている意味特徴とその説明内容に着目し、妥当性の低い意味説明に見られる特質や問題点を探る。以上の結果を基に、的確で正確な意味特徴説明を支える日本語分析技術のあり方と、手続き上の留意点を検討する。

3.1　調査の手続き

本研究は、日本語の専門知識や指導経験の影響を受けない類義語分析とそこでの意味特徴説明を精査する。教師など日本語教育経験者の類義語分析の場合、外国人学習者への指導を念頭に日本語分析をする点で、特殊なものといえる。また本研究の成果は、日本語分析技術の熟達度が低い教師や養成課程の被養成者への応用も視野にある。以上のことから、日本語に関する指導と意識的な分析の経験がない日本人大学生を、非教師の一般的な日本語母語話者として調査対象者に選定した。

調査協力者15名に対し、2018年７月から８月にかけて調査を行った。調査は以下の手続きで進められ、調査協力者には一組の類義語対の分析と記述を求めた。本研究のデータとする意味説明記述は、⑵の「類義語分析課題」によって収集したものである。

⑴フェイスシートへの記入および調査内容の説明

⑵類義語分析課題：提示される類義語対の意味内容について分析し、調査用紙（Ａ４紙１枚）に記述する（制限時間10分）。日本語学習者への指導は想定せず、調査協力者自身にとって自然な形で自由に分析する。用紙には以下の指示文を記載している。

> 提示された２つの言葉は、それぞれ、どのような意味を表しているでしょうか。
> ２つの言葉の違いがわかるように説明してください。

3.2　調査に用いる類義語対

中級以降の学習段階にある日本語学習者にとって類義関係が問題となる名詞「準備」「用

意」を調査に用いた。類義語分析課題での意味説明記述について妥当性が検討できるよう、類義語辞典などを参考に両語の意味特徴を整理した（表）[4]。それに基づき、調査協力者の意味説明に見られる不正確な点や逸脱した内容、類義語の意味特徴として認めにくい事がらへの言及の有無などを探った。なお本研究は母語話者による意味特徴の説明を対象とするため、意味以外の言語特徴については類義語対の弁別に重要であっても扱わないこととした。

表　類義語対「準備／用意」の意味特徴

＜基本の共通意味＞あることを行うにあたって、必要なものごとをあらかじめ整えておくこと
「準備」
⑴物事を行うために、あるいは将来起こることに対応できるように必要な物やこと・条件をあらかじめ行っておき、体制や環境を整えて、実行できる状態にすること
⑵行うことの規模が比較的大きい
1)総合的に態勢を整える
2)段階的に物事を進める
3)整える内容がものものしい（「用意」に比して）
⑶整えて目的の行動を始めるまでに時間が長くかかる
⑷慣用的用法：心に関して表現（「心」との共起）[5]
「用意」
⑴物事を行うために、必要な環境・状態や条件を整えたり、ものを手に入れたりして、いつでもすぐに使えるような状態にすること
⑵必要なものをとりそろえておく感じが強い
1)具体的な意味合いが強い（「準備」に比して）
2)万一のときのための必要な条件・態勢がそろっている
⑶整えて目的の行動を始めるまでに時間がかからない

４．結果

調査協力者による類義語対「準備／用意」の意味説明記述のうち、妥当性に問題があると判断できるものを、類義語辞典などから集約した規範的な説明と照らして特定した。そして、取り上げられている意味特徴とその説明内容という外形的に把握できる二点に着目し、妥当性の低い意味説明の特質と問題点を探った。なお調査協力者の意味説明は、全体が妥当性に欠けている場合と、妥当性の低い説明が部分的にのみ見られる場合がある。そこで、弁別的意味への言及の有無に関わらず、妥当性の低い説明部分を取り上げて結果を整理する。

まず、妥当性の低い意味説明において取り上げられている意味特徴は、「準備／用意」が表す行為を中心とした三つの事がらに整理できる。それらは「準備／用意」の弁別に重要な意味特徴で、妥当性の低い意味説明ではそのいずれか、もしくは複数が取り上げられている。しかし、類義語対の特質や相違点は明らかになっていない。

①「準備／用意」が表す行為の内容（どのようなことをするのか）
②「準備／用意」が表す行為の対象（どのような事物を備えるのか）
③「準備／用意」が表す行為の目的（何のために備えるのか）

なお本節以降に挙げる意味説明記述の具体例は、意味特徴に関する説明部分を全て挙げて

いる。例中の下線はすべて、本論文の筆者（坂口）によるものである。また説明内容に影響がない範囲で、改行などのレイアウトを一部変更している。

4-1.「準備／用意」が表す行為の内容に関する妥当性の低い説明

「準備／用意」の意味特徴を探る際に、両語が表す行為に着眼することは自然な分析手続きといえる。しかし、行為の具体的内容に関する説明には、妥当性の低いものが見られる。例えば例１の大学生７の場合、「準備」の意味特徴については行為内容にのみ焦点を当てて説明している（下線部分）。そのなかで「準備」が表す行為を「備え」とし、そこに「目的の行為を行うこと」も含まれるとしている。

⑴両方、未来の出来事に対して備える行為を指す。準備は事前に、目的の行為を行うことを含む備えのことをいう。対して用意は、目的の行為が万全のコンディションで行えるように、身の回りのことにおいて備えることをいう。　［大学生７］

この説明に基づくなら、例えば「食事の準備」と言った場合には備える行為に食事自体も含まれることとなるが、「準備」の意味内容をそのように捉えることは難しい。しかし一方で、例えば「試験の準備」と言う場合、その行為については試験会場の設営か、もしくは試験勉強という二通りの解釈が可能である。しかし大学生７の意味説明はそのような二通りの解釈も難しく、「準備」の行為に該当しないものまで含めている点で妥当性に問題があるといえる。

また、大学生９も「準備／用意」が表す行為のみを取り上げているが、特に費やされる時間の長さによって両語が表す行為を対比し相違点を指摘している。消費時間の長短は両語を弁別する意味特徴であるため、説明の妥当性は高い。一方で、「及第点まで持っていける」とする説明は、両語が表す行為に求められる達成水準や完成度への言及と考えられる。しかし、そうした事象は両語の行為内容にとって重要ではないため、妥当性に欠けた説明といえる。また、「及第点」という説明が示しているところも不明瞭さがある。

⑵短時間で及第点まで持っていけるものが用意
長時間で及第点まで持っていけるものが準備とする場合が多い　［大学生９］

なお大学生８も同様に、行為の達成水準という点から「準備」の意味を説明している。大学生８は行為内容のみを取り上げて「準備」の意味を説明しており、そのなかで「ある一定のところまで持っていく」と行為の達成水準や到達度に言及している（例３の下線部分）。なお、「用意」に関する説明は、最後の「視覚的な」という箇所で終わっている。

⑶準備　なにか行う時に必要なものをそろえることだが、「準備体操」「心の準備」など身体や心の状態をある一程のところまで持っていくことも指すイメージ。何か達成するための行動全般を指す。
用意　こちらもなにか行う際に必要なものをそろえることであり、主に「モノ」以外にはあまり使わないイメージ。目に見える「モノ」を実際動かし目の前に持ってくるなど視覚的な　［大学生８］

4-2. 類義語対が表す行為の目的に関する妥当性の低い説明

「準備／用意」が表す行為は何らかの目的や意図を持つ点が特徴的であり、妥当性の低い

意味説明にもそうした行為目的に着目したものが見られる。例えば例４の大学生10による「用意」の意味説明では、行為の内容に加えて、その目的についても「物事をスムーズに進めるため」と説明されている（下線部分）。しかし、「用意」の行為目的は物事を円滑に進めることにかぎらず、何らかの行為遂行や事態実現が目的としてはより重要な事がらとなる。そのため、行為目的を円滑さに限定している点で、妥当性の低い意味説明といえる。

⑷「準備」は、物事の前にそれにそなえてものをそろえたり行事などのために前もって設営などすること。「用意」は物事をスムーズに進めるためにやっておいたり、物をそろえること　［大学生10］

また大学生３の意味説明でも、類義語が表す行為とその目的に焦点が当てられている。例５は「準備」の意味説明部分のみを全文で示しているが、そこには事がらに「効率的に取り組めるように」という行為目的への言及が見られる（下線部分）。しかし効率性の追求は「準備」が表す行為目的としては限定的な説明であり、その点で妥当性に問題が指摘できる。また、一方の「用意」にも該当しうる意味説明であるために、結果として両語が十分に弁別できない説明である。

⑸準備　ある直前、もしくはこれから起きる事柄に対して前もって対策すること。また、その事柄に対して、いかに効率よく取り組めるように行うこと　［大学生３］

4-3. 類義語対が表す行為の対象に関する妥当性の低い説明

「準備／用意」が表す行為の対象への焦点化が妥当性の低い意味説明に見られ、備える事物やその特徴が説明されている。例えば大学生４は、行為の内容とその対象から「準備」を特徴づけている一方で、「用意」については行為対象のみを取り上げて説明している（例６）。そして下線部分のように、揃える物の分量や範囲という１点から、「準備／用意」の相違点を指摘している。「必要最低限なもの」という「準備」に関する説明は行為対象となる物の分量の少なさを示唆し、「先を見越して必要になるかもしれないもの」という「用意」の説明は分量の多さを示唆している。揃える物や備えの程度は両語の弁別的な意味特徴の一つだが、大学生４の説明は「準備」と「用意」を取り違えた形となっており、妥当性に問題がある。分量の少なさは、“当座必要なものをとりいそぎ揃える”という「用意」の意味内容に合致し、分量の多さは“段階的、総合的に物事を整える”という「準備」の意味内容に合致する。

⑹準備　何かを行う前に、事前に、それを行うために必要なものをそろえる。手順を踏む必要最低限なものをそろえるイメージ

用意　「準備」が必要最低限のものをそろえる感じがするのに対し、「用意」は他にも先を見越して必要になるかもしれないものをそろえる意味を含む　［大学生４］

また、「必要になるかもしれない」という「用意」の説明は、揃えた物が結果的に不要となる可能性を示唆している。しかし、そうした可能性は「準備」の場合もありうるため、この説明も妥当性に問題があるといえる。なお、揃えた物が不要となる可能性については、大学生17も「用意」の意味説明のなかで「用意したものがいつ使われるかは明確に決まっていないことが多い」と述べている。しかし、将来事態の不確実さに伴う対象物の利用可能性と

いう点からは、類義語対の相違点が把握しにくい。

例７の大学生５による意味説明では、「準備／用意」が表す行為とその対象が取り上げられており、特に両語の行為対象については「形」の有無という点から対比され特徴づけられている。このうち実体のある具体的な物が対象となるという「用意」の説明は、弁別的意味を示唆している。

⑺「準備」は、あまり形がないことに対しての言葉だと思う。発表の準備など。「用意」は物など形のあるもの、ことに対しての言葉だと思った。準備は段階を踏むと思うが、用意は１つのことをやるだけの違いがあると思う。　［大学生５］

一方で、「準備」については「発表の準備」という用例を挙げていることから、「あまり形がないこと」という対象に関する説明は作業などを示していると考えられる。しかし「発表の準備」と言った場合には必要な道具を揃えることもあり、実体ある物を「用意」の対象に限定した説明は十分ではない。また、用例中の「発表」は「準備」にとって行為目的となるが、大学生５は発表準備として行うことに着目し、行為対象としてのみ説明している点でも問題がある。

また、大学生11の意味説明（例８）は「準備／用意」の行為対象にのみ焦点化しており、両語の対象が共に「物」であることを指摘している。特に「用意」の対象については「物的なもの」としたうえで、さらに「道具」と具体化している（下線部分）。しかし、「用意」の行為対象は道具に限定されるわけではなく、その点で妥当性に問題のある説明といえる。

⑻準備　物だけでなく、心がまえの準備もある。
用意　物的なものを整える。主に道具。　［大学生11］

4-4. 類義語対の意味特徴に関する不明瞭な説明

前節までは、焦点が当たっている意味特徴に着目して、類義語対「準備／用意」に関する妥当性の低い意味説明を整理した。一方で、日本人大学生による妥当性の低い意味説明には、取り上げられる意味特徴の種類に関わらず、内容の曖昧さや不明瞭さが見られる。内容の曖昧な意味説明では、類義語対それぞれの意味特徴や両語の相違点が明確に示されない。例えば例９は大学生２の意味説明で、「準備／用意」の行為内容のほか、行為対象となるものに関わる両語の相違点に言及されている。このうち、「用意」の行為対象については具体的に列挙されているなかで、人を含むことが指摘されている。しかし、下線部分にある「急ごしらえの（またはよく訓練されていない）人員」という説明は、その指し示す事がらが不明瞭なものである。こうした不明瞭な内容の説明では「用意」の行為対象に関わる意味特徴として妥当なものと認めることが難しい。

⑼準備…何かに対するあらかじめの備え。「用意」よりも前の段階からなされている。物理的なもの以外にも使う（心の準備）手順を考えたり、本番の前に練習したりするのも「準備」
用意…「準備」よりもやや急に行われること？　モノや道具、急ごしらえの（またはよく訓練されていない）人員などに使うことば。物理的なものに使う
［大学生２］

大学生２は「用意」の対象についてのみ「人員」を挙げているが、「準備」の行為におい

てもその対象に人が含まれうる。しかし、名詞「人」を補語にとって直接的に文を作る場合、「人を用意する」と言語化することが容易である一方、「人を準備する」とは言語化がややしにくい。こうした点では、大学生２の指摘が「用意」の弁別性を示唆しているのかもしれない。

また大学生13は、「可能性の差」という一点にのみ焦点を当てて、類義語対の相違点を説明している（例10）。ここで述べられている「可能性」や確実性は、備えを要する将来事態の実現可能性のことと推察できる。しかし、大学生13の説明は「確実でないもの」や「確実なもの」という簡潔なものにとどまっており、示されている事がらが正確には把握しにくい。両語の意味特徴や相違点も明確になっておらず、妥当性に欠けた説明といえる。

⑽準備と用意の違いは可能性の差である。準備は確実ではないもの、用意は確実なものに使う ［大学生13］

例10が示すように、意味説明の簡潔さや端的さは内容の曖昧さや不明瞭さと関わりうる。大学生13の述べる「可能性」や確実性は備えが無駄になる可能性とも考えられ、説明内容の解釈が一つに定まらない。このように、簡潔な意味説明はその内容が曖昧となりやすく、結果として妥当性の低い意味説明ともなる。

4-5. 類義語対とその意味特徴を取り違えた形の意味説明

4-4と同様に、妥当性の低い意味説明において、取り上げられる意味特徴の種類に関わらず見られたもう一つの問題が、類義語を取り違えた形の説明である。日本人大学生による妥当性の低い意味説明には、取り上げた語と説明している事がらがたすき掛けのように類義語対で入れ違っている状態のものが見られた。例えば4-3節で見た大学生４の意味説明（例６）では、揃える対象の分量に関する説明が「準備」と「用意」を取り違えた形でなされている。また、大学生６の場合は、行為にかかる時間の長短についての説明が「準備」と「用意」で取り違えた形になっており、妥当性に欠けている（例11）。大学生６は「準備／用意」の行為内容にのみ焦点を当てて、備えるのにかかる時間の長さから両語の相違点を述べている。しかし、「直前に備える」とした「準備」の時間の短さは「用意」に、「長時間」とした「用意」の時間の長さは「準備」にそれぞれ合致するものである。

⑾準備も用意も前もって備えておく意を表わすが、準備の方が直前に備えるときに使われるように感じる。長期間、それに関して備えておくときに用意を用いると考えられる。 ［大学生６］

類義語対「準備／用意」を取り違えた形の例６と10の意味説明は妥当性に欠けているが、説明されている事がら自体は類義語対の意味特徴として妥当なものである。そのため、説明を入れ替えれば、類義語それぞれに合致した意味説明として成り立つケースである。

５．考察：妥当性の低い意味説明に見られる特質と問題点

日本人大学生による類義語対「準備／用意」の意味説明のうち、妥当性に問題のあるものについて、取り上げられている意味特徴とその説明内容という２点から整理してきた。妥当性の低い意味説明であっても、「準備／用意」の弁別にとって重要な意味特徴に焦点が当て

られていた。具体的には、類義語対が表す備える行為とその対象、行為の目的といった意味の側面への着目である。重要な意味特徴に焦点を当てながらも妥当性の低い意味説明がなされているという実態からは、意味特徴への焦点の当て方と説明内容に関わる特質と問題点が指摘できる。

第一に、意味特徴への焦点の当て方に着目すると、妥当性の低い意味説明においては類義語対の意味特徴の一側面に焦点を絞って説明する様子が窺える。本研究で扱った類義語対「準備／用意」の場合は、弁別性に関わる意味内容上のポイントが複数あるため、多面的に意味特徴を捉えて説明することが重要となる。しかし、日本人大学生に見られた妥当性の低い意味説明の場合は焦点の当て方が限定的で、説明全体を通しても意味内容の一側面からしか類義語を特徴づけていないというケースが目立つ。そのような焦点の限定的な当て方は、説明する意味特徴の範囲を狭め、ほかの重要な意味特徴の見逃しや説明もれを生じさせる。また、意味内容の一側面にのみ焦点を当てて説明する場合は、弁別的な意味特徴を的確に捉えて深掘りすることが重要となる。しかし、そうした分析が妥当性の低い意味説明ではなされておらず、取り上げる意味特徴を絞っていることが十分な意味説明の妨げとなり、結果として妥当性をより低下させている。

第二に、説明内容の点から見ると、妥当性の低い意味説明は精度の低いことが問題点として挙げられる。具体的には、「準備／用意」のものとは言いがたい事がらや両語と関係性の薄い事がらが、類義語対の意味特徴として述べられている。調査協力者による妥当性の低い意味説明は、明らかにすべき重要な意味特徴からは逸れた内容のものが目立つ。こうした精度の低い意味説明は、誤りではないものの的確で十分な説明とはいえず、類義語対の弁別的意味や相違点が不明確なままとなる。加えて、精度の低い意味説明には内容の抽象さも特徴的に見られる。抽象的な意味説明はその内容の不明瞭さから、説明されている事がらに該当する事象が複数生じうるほか、説明内容が類義語双方に該当する場合もある。結果として、類義語対の意味特徴が明確に把握できず、個々の類義語の特徴や相違点が不明な意味説明となる。

なお、焦点の限定的な当て方と精度の低い説明内容という二つの問題は、妥当性の低い意味説明において同時に見られる場合がある。意味説明の焦点が絞られるということは、説明される意味特徴の範囲が狭くなることと関連する。そして、類義語対の弁別性に関わる重要な意味特徴へと限定的な焦点が的確に当たらなければ、結果として意味説明は的外れで妥当性の低いものとなる。

妥当性の低い意味説明に見られた、意味特徴に対する限定的な焦点化と説明精度の低さは、日本語の専門知識と分析技術の不十分な母語話者にとっての類義語分析の困難点を示唆している。そうした困難点への対処法を考える場合、意味説明での焦点の当て方については、類義語の意味内容に含まれる要素の多くに目を向けて意味特徴を詳細かつ多面的に説明することが重要となる。例えば「準備／用意」の場合は、両語が表す行為とその対象、そして目的という要素に目を向けて、“何のために、何を、どのように行うか”という点をそれぞれ具体的に説明することが求められる。また説明の精度については、意味特徴への多面的な焦点化に加えて、類義語双方に該当するような説明や端的で抽象的な説明を避け、指示内容の不明瞭な表現を説明に用いないことが重要となる。以上のような手立てが、本研究で把

握した妥当性の低い意味説明の問題点に対処し、意味特徴を的確かつ明確に説明するための一助となるだろう。

６．まとめと残された課題

本研究は、不首尾に終わる日本語分析の実態を把握するために、日本語母語話者が行う類義語分析に生じる妥当性の低い意味説明に着目し、“どのような意味特徴について何を説明しているか”という点から精査した。その結果、妥当性の低い意味説明においては、意味特徴に対する焦点の当て方が限定的であることを把握した。母語話者は、類義語対の意味内容を多面的に見ず、ある一つの側面にのみ焦点を当てて意味特徴を説明する傾向が窺える。そして妥当性の低い意味説明に関するもう一つの問題点が、説明の精度の低さである。類義語対の弁別に重要な意味特徴に焦点を当てながらも、分析対象語の意味特徴とは認めがたい事がらや関連性のない事がらを説明するという問題が指摘できる。

以上のような成果の一方で、本研究では妥当性の低い意味説明の背後にある手続き的な問題については具体的に探れていない。例えば、本研究で精査した意味説明例には、類義語対の共通意味を挙げた後に相違点を説明するという手続きや、特定の意味特徴に関して類義語対を対比し相違点に言及するという手続きが見られた。妥当性の低い意味説明に特徴的な分析手続きと両者の関わりについて探る必要がある。さらに、妥当性の低い説明と同様に焦点の当て方が限定的であっても、意味特徴が的確かつ明確に説明されている場合もある。同じ手続きでありながら妥当性に差が生じている意味説明の相違点を探ることで、妥当性の低さに関わる手続きが詳細に検討できるだろう。そのほか、意味特徴の説明に用いられるメタ言語という点からも、妥当性の低い意味説明の特質と問題点を探る必要がある。

以上に挙げた課題について、調査対象とする日本語母語話者の数を増やしたうえで取り組むことにより、類義語分析で生じる妥当性の低い意味説明の全体像をより明確にでき、意味説明で陥りやすい失敗を把握できる。そして、失敗への対処や回避の手立てを検討することで、類義語をはじめとした日本語の的確で正確な意味説明を支える分析技術が明らかにできるはずである。

注

1)長期的視野に立てば、類義語など日本語に関する参考書などの規範的記述を批判的に利用する姿勢や、規範的記述にない事がらに気づけるような日本語力が教師には求められる。しかし、特に日本語の専門的知識が十分ではなく分析技術の習熟度も低い初心者教師などにとって、日本語力の水準が高まるまでは辞典や教師用参考書の記述が規範や目標になると考えられる。

2)鈴木ほか（2008）では、現役教師などから公募で得た「作品」と呼ぶ日本語の説明例を８つの「評価基準」に基づき「入選」・「佳作」・「選外」と評価している。このうち「選外」とされた説明例が、妥当性に問題があるものといえる。なお相対的に評価の高い「入選」と「佳作」の説明例については、「学習者によっては難しく、そのまま使えない可能性のある」語彙の使用がある場合はそれらが指摘されている。

3)用いられている「評価基準」は「構成」・「語彙・文法」・「構文・修飾」・「内容の確かさ」・「例」・

「展開」・「調子」・「その他」という８つである。このうち、説明の内容そのものに関わる評価基準は「構成」および「内容の確かさ」と考えられる。具体的に、２基準について以下のように説明されている。

・「構成」：説明の順序や取り上げる項目など、全体の組み立ては適切か。
⇒基本的な意味・用法の理解に導くとともに、必要に応じて、重要な事柄について言及したり注意を与えたりしているか。

・「内容の確かさ」：説明の内容は適切か。
⇒間違った解釈や不適切・不十分な説明、誤解を招く表現などはないか。

4）調査協力者による意味説明の内容について妥当性が検討できるよう、以下の文献を参考に類義語対「準備／用意」の意味特徴を整理した。

・『類義語使い分け辞典―日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』（田忠魁・泉原省二・金相順編、研究社、1998年、pp. 403-404）
・『類語大辞典』（柴田武・山田進編、講談社、2002年、p. 712）
・『新装版　使い方の分かる類語例解辞典』（小学館、2003年、pp. 140-141）
・『ちがいがわかる類語使い分け辞典』（松井栄一、小学館、2008年、p. 229）

5）心理的側面を表すことについては、辞典によって「準備」だけでなく「用意」の特徴ともされている。例えば『ちがいがわかる類語使い分け辞典』（松井栄一、小学館、2008年）は、心に関しては慣用的に「準備」を使うが「用意」も「細かく気を配る意」で使うこともあるとする。ただしその一方で、「『心』と『意』が重なる」ため「用意」は使いにくいとも説明している。また『類義語使い分け辞典―日本語類似表現のニュアンスの違いを例証する』（田忠魁ほか編、研究社、1998年）は、「用意」の「もともとの意味」が「『意』つまり、考え・気持ちを用いる、相手の要求・希望にいつでも応えられるようにしておく」ことと説明している。本研究では、慣用的用法とその使用頻度の高さを重視し、心理的側面を表すことは「用意」より「準備」に顕示的な意味内容とする。ただし、調査協力者が意味説明のなかで「用意」の心理的側面に言及した場合は、不正確な説明として扱わない。

付　　記

本研究の調査にご協力くださった皆様に、心より御礼申し上げます。なお本研究は、令和３年度信州大学基盤研究支援事業の支援を受けて行われました。

引用文献・参考文献

市川保子（2018）『日本語類義表現の使い方のポイント―表現意図から考える』　スリーエーネットワーク
倉持保男（1986）「日本語教育における類義語の指導」『日本語学』第５巻第９号　明治書院
鴻野豊子・高木美嘉（2016）『新人日本語教師のための授業づくり練習帖』　翔泳社
大森雅美・鴻野豊子（2013）『日本語教師の７つ道具シリーズ４　語彙授業の作り方編』　アルク
坂口和寛（2000）「類義語分析における日本語教師の意味分析ストラテジーの特徴―類義副詞の意味へのアプローチ」『信州大学留学生センター紀要』第１号　信州大学留学生センター
坂口和寛（2019）「類義表現分析において日本語母語話者が行う意味特徴説明」『信州大学人文科学論集』第６号　信州大学人文学部

坂口和寛（2020）「日本語母語話者が類義語分析において行う対比とその特徴」『信州大学人文科学論集』第７号（第２冊）　信州大学人文学部
柴田武・國廣哲彌・長嶋善郎・山田進（1976）『ことばの意味１　辞書に書いてないこと』　平凡社
鈴木智美・春原憲一郎・星野恵子・松本隆・籾山洋介（2008）『ことばの説明・文例集　この言葉、外国人にどう説明する？』　アスク出版
森田義行（1989）『基礎日本語辞典』　角川書店

（2021年10月31日受理，11月16日掲載承認）